

ホメオパシーへの批判

Part 3: ホメオパシーにおける科学概念

Friedrich Dellmour, Tribuswinkel, Austria

要約

目的: この論文の目的は、ホメオパシーに対し、不適切な科学概念を用いて方法論的に誤った批判が行われる主な理由を明らかにすることである。

方法: ホメオパシーの科学的基準、さらにホメオパシーが最も重要とする科学的・医学的な根拠を挙げていく。

結果: ホメオパシーは、医学、補完医学、ホリスティック医学、そして科学の基準を満たすものである。ホメオパシーの医学・科学原理は、現代医学や自然科学の原理と比較することは出来ない。

結論: ホメオパシーは独自の科学概念を持つ医療であり科学である。従って、ほとんどの現代医学や自然科学の基準はホメオパシーには当てはまらない。結果、それらはホメオパシーの評価には不適切である。

ホメオパシーにおける科学についての論争

この一連の論説の最初の2つの科学論文^{*1,2}では、ウィーンの医科大学とマスメディアによるホメオパシーの批判のほとんどが以下の5点に基づいて行われていると指摘している。(1) 方法論的誤り、(2) 不適切な科学概念の適応、(3) 人間と動物における臨床経験の無考慮、(4) 有効な科学論文の無視、(5) 報道関係者による不十分な調査。

ほとんどの批評家は、スイス政府から委任された Gudrun Bornhoeft と Peter F. Matthiessen の *the Health Technology Assessment Report (2006)* ^{*3} の肯定的な結果を無視している。この組織的な文献検索は、22 の医療データベースより得られた既に出版されている 107 の文献を基に行われ、ホメオパシーの効果と有効性をエビデンスに基づいた医療の基準に沿って証明した。さらに、ベルリンのシャリテ医科大学の Claudia Witt らによる組織的な文献調査(2007)^{*4}によって得られた肯定的な結果は、ホメオパシーの高いポテンシーの効果は試験管を用いた実験で証明することができるという証拠をも提示した。

それにも関わらず、Edzard Ernst や Simon Singh (2009) のような批評家は、「200もの臨床研究においてもホメオパシーの効果は実証されなかった。ホメオパシーは無効であることが証明された医療であり、中世への退行である。^{*5}」とホメオパシーに対しステレオタイプな異論を唱える。また新聞各紙^{*6,7}は、これらの誤った意見をそれ以上追求することなく、そのまま紙面に掲載している。しかしながら、プラセボ対照試験やエビデンスに基づく医療(補完医療に関する)の方法論的弱点を認識している人のみが、この問題を理解することができるのである。

さらに、ホメオパシーにおける科学概念は自然科学や現代医学(自然科学に基づくもの)における概念とは全く異なるものである。ホメオパシーは自然科学ではなく、ホメオパシー薬の効果は薬理学的の供与量効果関係(dose-effect relationship)に基づくものではない。それゆえ、自然科学の原理も現代医学の原理もホメオパシーの評価基準としては適切ではないのである。

ホメオパシーの科学概念についての論争の背景が示しているのは、その論争は公正に行われた科学的な議論ではなく、むしろ個人的見解や科学的／宗教的なイデオロギー、すなわち『世界観』の

相違に対するものであるということである。Herbert Pietschmann (2009)^{*8}は、この論争は最良の研究を行ったとしても解決することは出来ないと述べる。なぜなら自然科学とホメオパシーは異なった思考範囲を持っており、自然科学(の実態)は「事実」ではなく「(事実に対する)コンセンサス」に基づいているからである。この意見は、自然科学、従って現代医学も、「現実」を理解することに関心はなく、(その他の科学と同様に)主観によって歪められたものの見方による表現を行い、コンセンサスに固執することに関心があるということを示している。

ホメオパシー批判者と議論を行うため、また自身の利益のため、ホメオパシーは今後さらに科学的な質問に対処していくべきであるし、そのようなコンセンサスに近づいていく道を探していくべきである。Pietschmann はまた、この問題解決に必要なのは、さらなる研究でもなければホメオパシー自体を「説明」することでもなく、ある特定の説明が正しいというコンセンサス、言い換えるならば、ホメオパシーの説明は「科学界」で正しいと受け入れられているというコンセンサスによって解決出来ると述べる。これにあたり、医学や科学の基礎、そしてホメオパシーの作用機序についての回答を用意しておかなければならない。そして、その回答が「正しい」というコンセンサスを得るまでは、ホメオパシーの作用機序の詳細や研究結果の解釈に関する議論は始めることは出来ない。

このコンセンサスについての議論のための準備として、本論文では以下について述べていく。

- 科学とは何か？
- 医療とは何か？
- ホメオパシーは科学であるか？
- ホメオパシーにおける科学の基準とは何か？

科学とは何か？

Brockhaus (ドイツの百科事典)^{*9}によれば、科学とは「体系的に集積、保存され、教えられ、伝えられてきた一時代の人類の知識の本質」であり、「ある主題(Gegenstand[独])に関連する、正当な根拠に立脚した知識の総体」と考えられている。この定義は、科学とは「固定化」されたものではなく、時代や伝統にと深く結び付いているものであり、集積された知識としての科学はある主題に関連して、論理的にその対象と結びつけられている」ことを示している。その結果、科学とはある特定の分野の中でのみ有効であり、その論理はその特定の領域にのみ当てはまる。従って、自然科学の基準や論理はその分野の中でのみ有効であり、他分野の科学では適応することは出来ないし、それについて説明することも出来ない。

方法論的見地から言えば、科学とは「言葉で表現できる正当な根拠において実証された知識」であり、従って「ある特定の科学の基準(例えば、普遍妥当性、系統化)に準拠しながら間主観的に情報伝達でき、証明できるもの」であるが、一方、「適応されている方法はその特定の主題から派生したものである。」これは、科学的方法は、それぞれの対応する科学と関連していなければならないということを示している。このことはすべての科学に当てはまることであり、結果、ホメオパシーの科学の評価にも当てはまる。

太古の世界では、科学は分野別に分かれてはおらず一つのものであった。しかし、時の流れの中で枝分かれていき、いくつかの小さな分野が生まれ、方法論的に異なる2つの大きな科学の伝統が生まれた。

- 1□ 自然科学: 観察、仮説の組み立て、実験(仮説の検証、再現性の検証) 科学的知識を得るための方法^{*10}としての理論の確立に基づく学問。

2□ 解釈学:人文科学の方法。『観察』(という基本)を超えたアプローチ、また歴史的、文化的な解釈を利用する学問。

ホメオパシーの科学

ホメオパシーは、これらすべての理論的、方法論的な基準(自然科学の原理において科学的知識を得るための基本的な方法を含む)を満たしている。Haidvogel(2001)^{*11} は「ホメオパシーは、科学であるために必要とされるすべての基準を満たしている」と述べた。ゆえに、ホメオパシーは医療科学としての位置づけが可能で、経験科学と応用化学の側面を持っている。このことから、1968年にイギリスのエリザベス2世より彼女の王室医師に任命された Margery Blackie^{*12} が述べた「ハーネマンによって体系付けられたホメオパシーは、これまでに考え出された医療の中で最も科学的で、最も成功した医療体系である」という見解は十分妥当であることが分かる。

しかしながら、現代医学との議論の中でホメオパシーの科学が直面している問題は、両医療はそれぞれ異なる人間の実在の領域に焦点をあてており、従って互いに比較不可能な科学基盤に基づいているということである。

それぞれの基盤について以下に述べる。

- 異なる思考範囲

ホメオパシーの科学的思考範囲は現代医学のものとは整合性がない。それは現代科学^{*8}における西洋的思考の枠外にある。「科学的証明」に関して、西洋的な思考範囲の中で焦点があてられているのは、再現性、定量化、解析、矛盾のないこと、一貫性、因果関係を示す根拠である。ガリレオの“nova scienza”で最初に体系化されたこれらの基準は「定量化できる」という特徴に基づいており、「解析」は発見された現象を「分解」していくことを必要とする。従って、自然科学が解析できる現象はある程度単純なものに限られることになる。

これと対照的に、ホメオパシーの思考範囲は、特異性(個別性、主観性)、質的な特性(症状、モダリティ、知覚)、総合性(肉体と精神の領域すべての相互連関)、多義性、矛盾する現象(様々なレベルで見られる類似性、総合的知覚、開放系、個々の目的、体質的な影響、独創的な生命の過程)に基づいている。そして、さらにそれはホメオパスの独創性によっても決定される。

- 健康生成論 vs. 病原論

ホメオパシーは現代医学の科学原理とは相容れないものであり、ゆえにその原理を用いて説明することはできない。現代医学が基礎としているのは「病気の発生(病原論)」であるため、外部からの治療により病気の治療と予防をする。対して、患者自らが自己調整を行うことを目指す医療であるホメオパシーは「健康の生成(健康生成論)」に基づいているため、自己治癒力を刺激することによる病気の回復、健康の強化を目指す^{*14,15}。

- 自己治癒力 vs. 薬理学

ホメオパシー薬(レメディー)は薬学・薬理学の科学原理とは相容れないものであり、薬学・薬理学的論理では説明することはできない。病を治癒へと導く際、現代医療は生化学的に強く作用する薬剤を使用する。それらの薬剤は、治療にあたり容量効果範囲内の薬理学の定量的、統計学的知識に基づいて処方される。一方、ホメオパシーにおいては、高度に稀釈された、本来(生化学的な)作用の弱いレメディーを使用する。それらのレメディーは類似の法則の質的な知識、そして刺激-反応の原理に則った治療基準に基づき、個人個人に合わせて処方される。それゆえ、薬理学の診断・治療

原理(「人工的治癒」と自己治癒へと導くためのホメオパシー的な刺激(「自然治癒」)は、既往歴、病気の概念、処方、活性要因、治療の経過観察に関しても、比較することはできない。

- 臨床 vs. 科学

ホメオパシーは、科学的な説明というものがなされないまま理解され、教えられ、利用されてきた、実践重視の医療である。このため、ほとんどのホメオパシーの臨床家は「科学」について関心を持たず、ホメオパシーの科学的根拠を調べることにほとんど興味を示さない。ホメオパシーについて多くの臨床的・実験的研究が行われ、作用機序についての仮説も論文で発表されてきた。しかしながら、ホメオパシーの科学的根拠は未だ全く十分には研究されていない。

ホメオパシーの科学概念

ホメオパシーの医療的・科学的根拠についての体系的な研究がなされていないため、ホメオパシーの科学概念に関する包括的な文献は存在していない。現在存在している文献では、ホメオパシーの領域の一部分(ハーネマン、類似の法則、研究)に焦点をあて、その一部分と現代医療や自然科学を比べ、哲学的視点からホメオパシーを分析しているか、もしくは様々なホメオパシーの応用方法の主観的な観点から「科学概念」という言葉を使っている。

現在発表されているホメオパシーの「科学概念」に関する論文は、大きく分けて次に挙げる点について書かれている。

- ホメオパシー:主観的視点

Georg Heinrich Gottlieb Jahr (1857)^{*16}, James Tyler Kent (1954)^{*17}, Margery Blackie (1990)^{*12}, George Vithoulkas (1987)^{*18}, Rajan Sankaran (1995)^{*19} 他は、「科学」という言葉、主観的なホメオパシー的視点から見たその理論と実践に対して使っている。

- 哲学:ハーネマン

Ekkehard Fraentzki (1976, 2005)^{*20,21}, Claus Just (1989)^{*48}, Josef M. Schmidt (1990)^{*22}, Volker Hess (1994)^{*23} は、ハーネマンの哲学的観念について研究を行った。それに対する解釈、「演繹的問い」と類似性原理に関する哲学論文は Klaus Holzapfel (2009)^{*49} によって発表された。

- 哲学:認識論と科学

Rudolf Flury (1979)^{*24} と Pierre Marie-Dominique Philippe (1994)^{*25} はホメオパシーの認識論的な側面について述べた。Gerhard Resch と Viktor Gutmann (1987)^{*26,27} は認識論的アプローチとホメオパシーの科学的事実と仮説を組み合わせた。Friedrich Dellmour (1997)^{*28} はホメオパシーの体系－理論的側面の研究を行った。

- 自然科学:臨床研究と実験的研究

Max Haidvogel (2001)^{*11} 他は、臨床研究と実験研究(臨床)、そしてホメオパシー薬の作用機序に関する問いに対して、科学の概念を用いた。

- 自然科学:パラダイムの不一致

Friedrich Dellmour (1995, 1999, 2005)^{*13,29,30,31}, Matthias Wischner (2004)^{*32}, Fraentzki (2008)^{*33}, Pietschmann (2009)^{*8} と and Wolfgang Würger (2009)^{*50} は、ホメオパシーと現代医学との間のパラダイムの不一致についての研究を行った。

ホメオパシーにおける科学概念/NCHK 4/ 12

- 医療:作用機序

Dellmour (1997, 2005)^{34,13} は、ハーネマンが用いていたバイタルフォースという思考モデルとハーネマンが当時用いた用語の医学的妥当性についての研究を行った。その結果、ホメオパシーの作用機序に対する医学的解釈を得た。Dieter Melchart (1993, 2002)^{14,15} は、自己調整を促す治療の基礎についての研究を行った。そして、現代の視点からホメオパシーの作用機序を理解することができた。数人の著者は、ホメオパシーの解釈のために量子医学の試みを提示した。(しかしそれは主に Pietschmann (2009)⁸ が適応不可能と判断していたものであった。)

これらの科学的貢献は現代医学のコンセンサスを得るにはまだ不十分ではあるが、ホメオパシーの科学概念の発展と現代医学とのコンセンサスの議論のためのホメオパシーの医学的・科学的な根拠の概要を提示してくれた。

科学的基礎

医師であり、化学者、薬剤師でもあったサミュエル・ハーネマンは、1812年にはライプティヒ大学で教鞭をとっており、その時代の全医療の知識の概要を把握していた。いくつかの科学協会にも所属しており、1822年、宮廷の顧問官(Hofrat[独])に選出され、あのゲーテよりも広範囲に及ぶ科学論文を残した。ハーネマンは、自分の患者の全治療データを記録した、先駆的な医師のひとりであった。注意深き観察者であった彼は、自身の研究論文を数多く発表した。それにより、我々は今日でもホメオパシーの歴史的基盤を再考することができるのである。

彼の時代の医療は十分なものではなかったため、ハーネマンは新しい治療原理を探していた。1790年、彼はキナ皮の実験を通してホメオパシーの類似の法則を発見した。そして、広範囲に及ぶ文献⁸を参照しながらその実験を記録した。彼のホメオパシー的治療はもっぱら肉体的もしくは精神的に知覚可能な症状に基づいて行われ、彼はホメオパシーを「知覚による医療」¹³として発展させた。そのため、患者はすべてのひとつひとつの訴えを口頭で説明し、それらは「病気の像」として質的・記述的に記録されている。その結果、ホメオパシーでは、病またはレメディーという「刺激」に対する生体の反応を通して、病とレメディーの作用の両方を認識する。この科学的基礎に基づいて、ハーネマンは、類似の法則の薬効学的基礎^{42, 43}として、ホメオパシーにおいて最も重要な要素⁴¹であるブルーピング(健康なボランティアにレメディーを投与することでホメオパシー薬の効能を明らかにする方法)を発展させた。

ハーネマンは、レメディー、病、環境のすべての刺激に対する生体の反応を「バイタルフォース」と名付けられたものの働きとして説明した。「エネルギーの一般概念」に基づくこの歴史的・科学的思考モデルは、自律神経の影響による自己調整機能と同一のものであると今日では考えられている。現在の健康生成理論によれば、ハーネマンの思考モデルは生理学的な自己調節および自己治癒の刺激と見なすことができる。従って、作業仮説として、ホメオパシーや類似の法則は神経科学的作用メカニズムに基づく要約できる。刺激-反応原理では、稀釈浸透(ポータンタイズ)されたレメディーに対する生体のホメオパシー的な反応は、投与量非依存的なものである。そのレメディーの「薬としての情報」は原物質の分子濃度には依存せず、金属導体通過、電子的増幅、デジタル処理保存が可能なものである。ゆえに、ホメオパシーは「情報医療」⁴⁴と理解することができる。

医学的基礎

①「医学」(治癒へと導く医療芸術)として、ホメオパシーは「その原因、効果、そして病気の予防と治癒についての健康・病気の人間の科学」³⁵であり、「治癒芸術」、「医療科学」³⁶である。②「補完医療」として、ホメオパシーは「特定の診断・治療手段が適応されるもので、部分的に現代医学の枠外

にあり、現代医療を補完するものである」。その基礎は、自己治癒過程、その刺激と促進、適応、そして抵抗力と自律性の向上、増強、刺激－反応原理、もしくは正常化への過程である。③「ホリスティック医療」として、ホメオパシーは「精神的・肉体的全体性、環境との相互作用を考慮する」。現代医学とは対照的に、診断や治療において症状の主観性、個別性が考慮される。

ホメオパシーは上記3つすべての定義に完全に当てはまるものである。従って、ホメオパシーは補完医療やホリスティック医療の基準に沿った医療である。欧州ホメオパシー委員会^{*37}(2003)は、ホメオパシーは類似の法則に基づいた臨床的医療であるとしている。

ホメオパシーは現代医学の基礎とは異なった医学の基礎に基づいている。

そのいくつかは上で述べた論文の中で取り上げられており、その引用を以下に挙げる。

解剖学:	自律神経系と脳神経系
組織学:	基礎調節システム
生理学:	自己調節システム、自己治癒、健康生成理論
病理学:	症状の全体、個々の疾患像、症状の原則、モダリティ
心理学:	機能単位としての肉体と精神
薬理学:	稀釈浸透されたレメディー、生体情動的有効要素、健康なボランティアを用いたレメディーのプルービング、レメディー像、マテリアメディカ

これらの医療・科学の基礎は明確な法則、原理、機能に基づいており、それらは現代医学では知られていないが、ホメオパシーを評価する際には考慮しなければならないものである。人間の理解(人間に対する考え方)やホメオパシーの思考範囲は西洋医学とは相容れず、そして自然科学の思考範囲を越えるものである。

ホメオパシーは、体系的に収集された学術的で伝統的な知識に基づき、その根拠の論理的背景を持ち、さらに人間と動物の臨床においてその効果が証明され、臨床的・実験的裏付けを持つひとつの独立した医療科学である。

科学的論争

ほとんどの批評家はこれらのホメオパシー医学の基礎を知らず、しばしば彼らの批評のなかではこれらの基礎は無視されている。多くの批評家が批判しているのは、自分たちの科学の概念や自分たちの世界観と一致しないホメオパシーの側面についてである。また、ホメオパシーの弱点、または現存する全ての科学論文に目を向けずに単一の研究について批判している。実際、批評家たちの批評の矛先はホメオパシー自体ではなく、彼ら自身の考え方との矛盾に対して向けられているのである。

このような批判は、異なる科学的視点同士の衝突のように見え、ゆえにホメオパシー自体に対するものではない。Herbert Pietschmann (2002, 2005, 2007)^{*45,46,47}は、このような科学的論争の原因について調査を行った。ホメオパシーへの批判は建設的な議論ではなく、西洋論理の公理や「特異性や無矛盾」を求める傾向に沿った自然科学や現代医学の偏った思考パターンに基づいた科学的思想の衝突である。このような批判が起こるのは、批評家たちの認識論的弱さからである:「論理や合理的であることだけに頼る人にとって、全ての矛盾は常に取り除くべき誤りにしか見えない。従って、どんな矛盾においても一方が正しく、もう一方が間違っているのである。」^{*45} このような「正しい・間違っている」といった合理的思考は、批評家たちに目隠しをし、現実が見えないようにさせている。健康や病、そして人々の治癒に関連する様々な分野は、自然科学や現代医療にとっては理解しえない分野である。ホメオパシーはそのいくつかの分野をカバーしており、ホメオパシーの治療でも効果的に

利用されている。^{*13} しかしながら、ほとんどの批評家は、彼らの視点から見たホメオパシーの矛盾はそもそもホメオパシーの「間違い」に基づいているのではなく、彼ら自身の「視野の限界」に基づいていることに気付いていない。

さらに、ホメオパスや批評家たちは弁証法的に弱い傾向がある。Pietschmann はそれを「限界」(Schatten[独]、影)と云っている。単に自分の見解のみを述べる批評家は偏狭になりがちであり、他方では自らの思考過程を批判的に追求していかない受け入れ型の人は騙されやすい傾向にある。このように、「正しい・間違っている」に関する論争は、ホメオパシー自体に対してではなく、互いの「限界」に対しての論争であるように思われる。批評家たちは、ホメオパスひとりひとりの思慮を欠いた騙されやすさと戦い、ホメオパスたちは批評家ひとりひとりの思慮を欠いた偏狭さと戦っている。しかしながら、客観的な議論には、互いの限界に対処する適切なバランスが必要となるだろう。自制心を欠くと批評家もホメオパスも「互いの限界の中」に留まったままになってしまうことになる。頑固な批評家は自分の偏狭さから離れられず、非科学的な教義を受け入れるホメオパスは騙されやすいというハンディキャップを負っている。「批評」は「騙されやすさ」と戦い、「偏狭さ」は「何でも受け入れる理性の広さ」と戦う。また、「偏狭さ」は「騙されやすさ」と戦う。これらの戦いには永遠ほど長い時間がかかるだろう。なぜなら、両者は正しく、複雑な医療問題において真実を確立するのに「騙されやすさ」や「偏狭さ」の視点は適切ではないからである。

Herbert Pietschmann は、“HX-confusion”^{*45,46,47}としてこの弁証法のプロセスを図示し、この論争の解決策を提案した。批評家とホメオパスの両方は、自分の真の敵対者は自分自身の「限界」であると気付かなくてはならない。そして、統合に近づくため、そして弁証論的過程を向上させるために自らを制御しなければならない。これにより、異なる見解の論争は科学の発展に貢献していこう。従って、ホメオパシーと現代医学のコンセンサスの議論は、人類の医療の知識の拡張と進化へと繋がっていく可能性がある。

批評家の「限界」

自然科学の根拠の論理的背景は自然科学の思考体系の中でのみ有効であり、その他の科学には適応できない。批評家たちはこの自然科学の限界をしばしば無視している。^{*13} また、自然科学の科学的アプローチ方法は、ホメオパシーについて十分な説明を与えるものではなく、(もし自然科学と現代医学が唯一妥当な思考体系であると考えるのであれば)それは「偏狭な考え方」という目隠しとなってしまおう。他の科学に対するこのような合理主義もしくは神学理論の「限界との戦い」はホメオパシー自体に関連するものではない。というのも、現代医学、薬理学、自然科学、そして宗教から派生してきた批評は、本論文シリーズの最初の3本で述べられたように、そもそも彼らの認識に起因している。そのような批評はホメオパシーの医学的・科学的基盤を無視するものであり、ホメオパシーの評価には適切ではない。

ホメオパスの「限界」

同様のことが、上記で述べられたように、ホメオパシーの科学に対してもいえる。ホメオパシーの原理はホメオパシーの思考体系の中でのみ有効である。この「限界」が無視されたり、ホメオパシーの思考体系が唯一認識の正しい方法であると考えたり、ホメオパシーの科学的基礎についての研究が省かれたりした場合、ホメオパシーは「騙されやすさ」に陥っていく。

ホメオパスの「限界」とは何であろうか。歴史的な基盤にも科学的な基盤にも基づかず、哲学的で深遠で、秘传的、魔術的で、スピリチュアル的にホメオパシーを「説明」する主張も存在している。しかし、ホメオパシーとおとぎ話、神話、象形学、人智学、バッチフラワーレメディー、エネルギーとの関連や、ホメオパシーと心理学、超心理学、占星術、シャーマニズム、神秘学、スピリチュアルヒーリングとのホメオパシーにおける科学概念/NCHK 7/12

混同は避けなければならない。ホメオパシーは独自の医療基盤に基づいて教えられ、提示されていくべきである。「ホメオパシーのコミュニティ」の中ではこのようなコンセンサスは、現代の学術レベルでのホメオパシーの位置付けのためには必要である。その結果、世間の人々のイメージは良くなり、学界や医療制度において恩恵を受けることができる。そして、批評家や「確立された」医療との対決の場に、ホメオパシー側が本格的に出場することができるようになるのである。

著者:

Friedrich Dellmour、内科医、ホメオパシー医、化学工学者。1986年からホメオパシーの科学的基盤についての研究に没頭する。雑誌”Homeopathy in Austria”の創始者(1990)。彼は the Ludwig-Boltzmann-Institute for Homeopathy (Graz, Austria)の特別研究員、ブリュッセルの the European Committee for Homeopathy (ECH)で、薬理学の小委員会、マテリアメディカ、薬局方 Pharmacopoeia (1993-2000)のコーディネーターとして働いていた。2008年より、ホメオパシーの間違った批判に対して議論を集め、発展させている。彼は the Austrian Association of Homeopathic Medicine (ÖGHM)の科学部門を率いている。

翻訳:

家木妙子、吉川真希

Literature:

1. Dellmour F: Criticism of homeopathy. Part 1: The image of homeopathy in the public (Homöopathie-Kritik. Teil 1: Das Bild der Homöopathie in der Öffentlichkeit). Homöopathie in Österreich 2008;3: 35-41.
2. Dellmour F: Criticism of homeopathy. Part 2: Criticism, critics and evidence-based medicine (Homöopathie-Kritik. Teil 2: Kritik, Kritiker und Evidence based Medicine). Homöopathie in Österreich 2009;1: 19-25.
3. Bornhöft G, Matthiessen PF (eds.): Homeopathy in health care – efficacy, benefit, safety and economic efficiency. A HTA-report on homeopathy within the framework of the program evaluation of complementary medicine in Switzerland (Homöopathie in der Krankenversorgung - Wirksamkeit, Nutzen, Sicherheit und Wirtschaftlichkeit. Ein HTA-Bericht zur Homöopathie im Rahmen des Programms Evaluation Komplementär-mezizin in der Schweiz. VAS – Verlag für Akademische Schriften, Frankfurt 2006. Recension (Rezension): Homöopathie in Österreich 2008;2: 42.
4. Witt CM, Bluth M, Albrecht H, Weißhuhn TER, Baumgartner S, Willich SN: The *in vitro* evidence for an effect of high homeopathic potencies – A systematic review of the literature. Complementary Therapies in Medicine (2007) 15, 128-138.
5. Singh S, Ernst E: Trick or Treatment: The Undeniable Facts about Alternative Medicine; W. W. Norton & Company; 1 edition (August 17, 2008). German edition: Healthy without pills. What can alternative medicine do? (Gesund ohne Pillen. Was kann die Alternativmedizin? Aus dem Englischen von Klaus Fritz. Carl Hanser Verlag, München 2009). Recension (Rezension): Homöopathie in Österreich 2009;3: 45-46.
6. Foppa D: Homeopathy is a confuted method. Edzard Ernst, the worldwide first professor for complementary medicine, strongly criticises his discipline. He is paying 100.000 Dollars to everybody who can proof the effectiveness of homeopathy (Homöopathie ist eine widerlegte Methode. Edzard Ernst, der weltweit erste Professor für Komplementärmedizin, geht mit seiner Disziplin hart ins Gericht. Er zahlt jedem 100'000 Dollar, der ihm die Wirksamkeit von Homöopathie nachweist). Tages Anzeiger Schweiz, 10.4.2009 (Online edition www.tagesanzeiger.ch/wissen/medizin-und-psychologie/Homoeopathie-ist-eine-widerlegte-Methode/story/16361064)
7. Wittels M: Placebo, placebis, placebit. In their book „Trick or Treatment“ the physicist Simon Singh and Edzard Ernst, physician for complementary medicine, have taken on alternative medicine: What is the effectiveness of acupuncture, homeopathy, chiropractic or herbal medicine? (Placebo, placebis, placebit.

In dem Band „Gesund ohne Pillen“ haben sich der Physiker Simon Singh und der Komplementärmediziner Edzard Ernst der Alternativmedizin angenommen: Wie wirksam sind Akupunktur, Homöopathie, Chiropraktik und Kräuterheilkunde tatsächlich? Die Presse, 24.7.2009 (Online edition, <http://diepresse.com/home/spectrum/literatur/497801/Placebo-placebis-placebit>) and 25.7.2009: Literatur VII.

8. Pietschmann H: The thinking frame of natural science and its limits with regard to homeopathy (Denkrahmen der Naturwissenschaft und seine Grenzen in Hinblick auf die Homöopathie). Lecture for the Austrian Pharmacists Association. Fortbildungsabend der Österreichischen Apothekerkammer der Landesgeschäftsstelle Wien und des Interdisziplinären Homöopathischen Arbeitskreises. Pharmaziezentrum UZA II, Althanstrasse 14, 1090 Wien, Hörsaal 8. 18.5.2009, 19-21 Uhr.
9. Brockhaus encyclopedia in twenty four volumes (Brockhaus Enzyklopädie in vierundzwanzig Bänden). 19. Auflage, Band 24. F.A. Brockhaus, Mannheim 1994: 227.
10. Sönnichsen AC: Requirements for an appropriate research method in complementary and alternative medicine (Powerpoint Presentation) (Anforderungen an eine geeignete Forschungsmethodik im Bereich CAM (Powerpoint Präsentation). Workshop CAM-Forschung, Status Quo und Perspektiven für die Komplementär-mezizin und integrative Gesundheitsforschung. Bundesministerium für Gesundheit, Wien 25.5.2009.
11. Haidvogel M: Science in Homeopathy (Wissenschaft in der Homöopathie). In: Stacher A, Marktl W (eds.): Holistic medicine in the future (Ganzheitsmedizin in der Zukunft). Bericht des 1. Zukunftssymposiums der Wiener Internationalen Akademie für Ganzheitsmedizin, 17.-18. November 2000. Schriftenreihe der Wiener Internationalen Akademie für Ganzheitsmedizin, Band 22. Facultas, Wien 2001: 70-78.
12. Blackie M: Living homeopathy. Collected experience as vital materia medica (Lebendige Homöopathie. Gesammelte Erfahrungen als vitale Arzneimittellehre). Johannes Sonntag, München 1990.
13. Dellmour F: Science and homeopathy. Two partitions of reality (Naturwissenschaft und Homöopathie. Zwei Teilbereiche der Wirklichkeit). In: König P. (ed.): Cure by the similar (Durch Ähnliches heilen). 2. Auflage. LexisNexis ARD Orac, Wien 2005: 167-196.
Qualities (Qualitäten): 173; Thinking model of homeopathy (Denkmodell der Homöopathie): 179; Sensorial medicine (Sensorische Medizin): 179; General concept of force (Allgemeiner Kraftbegriff): 179-180; Vital force – auto-regulation (Lebenskraft – Autoregulation): 180-185; idea of man of homeopathy (Menschenbild der Homöopathie): 186.
14. Melchart D, Wagner H: Naturopathy. Basics of an auto-regulative therapy (Naturheilverfahren. Grundlagen einer autoregulativen Therapie). Schattauer, Stuttgart 1993.
15. Melchart D, Brenke R, Dobos G, Gaisbauer M, Saller R: Naturopathy. Guide for the medical training (Naturheilverfahren. Leitfaden für die ärztliche Aus-, Fort- und Weiterbildung). Schattauer, Stuttgart 2002.
16. Jahr GHG: The doctrines and principles of the complete theoretical and practical medical science of homeopathy (Die Lehren und Grundsätze der gesamten theoretischen und praktischen homöopathischen Heilkunst). Samuel Gottlieb Liesching, Stuttgart 1857. Faksimile-Nachdruck, Ulrich Burgdorf, Göttingen (undated facsimile reprint).
Hahnemann's concept of science (Wissenschaftsbegriff Hahnemanns): chapter 7-9.
17. Kent JT: Lectures on Homoeopathic Philosophy. Indian Books & Periodicals Syndicate. New Delhi (undated reprint).
Lecture XVII: The science and the art: 109-113.
German edition: Kent JT: Zur Theorie der Homöopathie. J. T. Kents Vorlesungen über Hahnemanns Organon. Translated by Jost Künzli von Fimelsberg. Grundlagen und Praxis, unchanged reprint of the 3. edition, Leer 1986.
Chapter XVII: Science and art of healing (Wissenschaft und Kunst des Heilens): 158-166.
Title of the American original edition: Lectures on Homoeopathic Philosophy. Ehrhart & Karl, 5th ed., Chicago
ホメオパシーにおける科学概念/NCHK 9/ 12

1954. Title of the French edition: La Science et l'Art de l'Homoéopathie. Maisonneuve, 2 me édition, Ste. Ruffine 1969.
18. Vithoulkas G: The scientific homeopathy. Theory and practice of natural healing (Die wissenschaftliche Homöopathie. Theorie und Praxis naturgesetzlichen Heilens). German transcription by Gotthard Behnisch. Ulrich Burgdorf, 2. edition, Göttingen 1987. Title of the original edition: The science of homeopathy.
 19. Sankaran R: Homoeopathy. The Science of Healing. B. Jain Publishers Pvt. Ltd., Dehli, Reprint edition 1995. Preface: „Homeopathy ... is a scientific principle hammered out of hard facts. It is a proven law backed by indisputable logic“. Foreword by Jugal Kishore: “Homoeopathic philosophy should be presented in our institutions as part of clinical subjects“.
 20. Fräntzki E: Samuel Hahnemann's concept of science (Die Idee der Wissenschaft bei Samuel Hahnemann). Karl F. Haug, Heidelberg 1976.
 21. Fräntzki E: Samuel Hahnemann's concept of science (Die Idee der Wissenschaft bei Samuel Hahnemann). Schriftenreihe der Gleeser Akademie homöopathischer Ärzte, Heft 2. Neue, durchgesehene Auflage, Wunnibald Gypser Verlag, Glees 2005.
 22. Schmidt JM: Samuel Hahnemann's philosophical ideas in the course of establishing homeopathy (until publishing “Organon of the Rational Art of Healing”, 1810) (Die philosophischen Vorstellungen Samuel Hahnemanns bei der Begründung der Homöopathie (bis zum Organon der rationellen Heilkunde, 1810). Johannes Sonntag, München 1990. Science (Wissenschaft): 195. Limitations of science (Grenzen der Wissenschaft): 199.
 23. Hess V: Samuel Hahnemann and the semiotics (Samuel Hahnemann und die Semiotik). Medizin, Gesellschaft und Geschichte: MedGG; 12. 1993 (1994): 177-204.
 24. Flury R: Epistemology and homeopathy. Introduction into the principle of classification of the practical repertory of Dr. med. Flury (Realitätserkenntnis und Homöopathie. Einführung in das Ordnungsprinzip des Praktischen Repertoriums Dr. med. Flury). Aus Vorträgen und Manuskripten herausgegeben von Dr. med. Gerhard Resch und Mechtild Flury-Lemberg. M. Flury-Lemberg, Bern 1979. Science and homeopathic medicine (Wissenschaft und homöopathische Medizin): 45.
 25. Philippe PMD: Is a Realistic Philosophy Necessary to the Art of Healing? Homoeopathica Journal of LMHI Spring 1994: 10-17.
 26. Resch G, Gutmann V: Scientific Foundations of Homeopathy (Wissenschaftliche Grundlagen der Homöopathie). O.-Verlag, 2. edition, Berg am Starnberger See 1987.
 27. Resch G, Gutmann V: Scientific Foundations of Homeopathy. Translated by Ulrike Resch and Viktor Gutmann. Barthel & Barthel Publishing, Berg am Starnberger See 1987.
 28. Dellmour F: Homeopathy and system theory. Determining the current position (Homöopathie und Systemtheorie. Eine Standortbestimmung). Schriftenreihe der Wiener Internationalen Akademie für Ganzheitsmedizin, Band 18, Facultas-Universitätsverlag, Wien 1997: 93-121.
 29. Dellmour F: The question of scientificity of homeopathy. Determining the current position (Zur Frage der Wissenschaftlichkeit in der Homöopathie. Eine Standortbestimmung). Documenta Homoeopathica, Band 15. Maudrich, Wien 1995: 265-306.
 30. Dellmour F: Homeopathic remedy effect and placebo effect. An attempt to determin the current position (Homöopathische Arzneiwirkung und Placebowirkung. Versuch einer Standortbestimmung). In: Stacher A. (eds.): Placebo and placebo phenomenon (Placebo und Placebophänomen). Symposium der Wiener Internationalen Akademie für Ganzheitsmedizin. Band 15 der Schriftenreihe der Wiener Internationalen Akademie für Ganzheitsmedizin. Facultas Universitätsverlag, Wien 1995: 162-197.
 31. Dellmour F: Homeopathy and science - the relevance of thinking frame and paradigm (Homöopathie und Wissenschaft - die Bedeutung von Denkraumen und Paradigma). Deutsche Zeitschrift für Klinische Forschung Heft 2, Jg. 3, April 1999: 18-24.

32. Wischner M: Similarity in Medicine: About the scientificity of homeopathy and conventional western medicine (Ähnlichkeit in der Medizin: über die Wissenschaftlichkeit von Homöopathie und Schulmedizin). KVC, Essen 2004.
33. Fräntzki E: Scientifically determined medicine and homeopathy. A discussion (Naturwissenschaftlich bestimmte Medizin und Homöopathie. Eine Auseinandersetzung). Schriftenreihe der Gleeser Akademie homöopathischer Ärzte, Heft 3. Wunnibald Gypser Verlag, Gleees 2008.
34. Dellmour F: Homeopathy and vital force. Terms and definitions used by Samuel Hahnemann (Homöopathie und Lebenskraft. Begriffe bei Samuel Hahnemann). Documenta Homoeopathica, Band 17. Maudrich, Wien 1997: 63-103.
Thinking model of vital force (Denkmodell der Lebenskraft): 67.
35. Pschyrembel, Clinical dictionary (Klinisches Wörterbuch). 261. Auflage, Walter de Gruyter, Berlin 2007.
36. Reuter P, Springer dictionary of medicine (Springer Lexikon Medizin). Springer, Berlin 2004.
37. European Committee for Homeopathy (ECH). www.homeopathyeurope.org
Position Paper: The ECH and its position in the domain of homeopathy. November 2003 (Download 3/2007).
"Homeopathy is a clinical method based on the principle of similarity, i.e. the empirical principle that substances capable of causing disorder, symptomatic, functional or pathological, physical or psychological, in healthy subjects can be used as medicines to remedy similar patterns of disorder experienced by people (and animals) when they are ill. Skilled homeopathic prescribing requires that the similarity of the characteristics of the chosen medicine should be as close as possible to the characteristics of the illness in the patient – the "simillimum". The homeopathic method encompasses a set of coherent theoretical principles and a set of generally tried and verified principles of prescribing and of assessing its effect."
38. Dellmour F: The similia principles. Part 2: The cinchona bark trial (Die Ähnlichkeitsprinzipien. Teil 2: Der Chinarindenversuch. Homöopathie in Österreich Jg. 18, Heft 2, Sommer 2007: 23-29.
39. Hahnemann S: An attempt about a new principle for finding new healing powers of medicinal substances with some views on the old ones (Versuch über ein neues Prinzip zur Auffindung der Heilkräfte der Arzneisubstanzen nebst einigen Blicken auf die bisherigen). Hufelands Journal der praktischen Arzneikunde, 2. Band, 3. Stück (1796). In [40]: Band 1: 135-198.
40. Hahnemann S: Minor medical writings (Kleine medizinische Schriften). Hrsg. von Dr. E. Stapf, Dresden und Leipzig 1829. 2 Bände. 2., unv. Nachdruck der Erstausgabe, einbändige Ausgabe, Haug, Heidelberg 1989.
41. Hering C: Dr. X. Ypsilon's inaugural speech when taking over the professorship at the university of Strassburg in **** (Des Doctor X. Ypsilon Antrittsrede bei Uebnahme der Professur der Homöopathie auf der Universität zu Strassburg im Jahre ****). In: Gypser KH (Hrsg.), Herings medizinische Schriften in drei Bänden. Burgdorf, Göttingen 1988. Band 3: 1614.
42. Dellmour F: The similia principle of homeopathy. Parts 1-4 (Das Simileprinzip der Homöopathie. Teile 1-4). Deutsche Zeitschrift für Klinische Forschung (Februar, April, August, Oktober 2000).
43. Dellmour F: The Similia principles. Part 1: Introduction (Die Ähnlichkeitsprinzipien. Teil 1: Einleitung). Homöopathie in Österreich Jg. 17, Heft 4, Winter 2006: 15-21.
44. Dellmour F: Homeopathy. Contribution for the curriculum energy medicine of the German society for energetic and information-medicine e.V. (Homöopathie. Beitrag für das Curriculum energy medicine (Energetische und Informationsmedizin) der Deutschen Gesellschaft für Energetische und Informationsmedizin e.V.). Manuskript. Tribuswinkel, 20. April 2009.
45. Pietschmann H: Eris & Eirene. A guide for dealing with scientific conflicts (Eris & Eirene. Eine Anleitung zum Umgang mit wissenschaftlichen Konflikten). Ibera / European University Press, 1. Auflage, Wien 2002.
46. Pietschmann H: About the handling of scientific conflicts. Movements on the waterfront (Vom Umgang mit wissenschaftlichen Konflikten. Bewegung an der Wasserfront). Vortrag am Kongress „Wasser – Schatz der Zukunft“ am 13.-15. Mai 2004 in Salzburg. Würzburger medizinhistorische Mitteilungen 24 (2005): 425-433.

47. Pietschmann H: Phenomenology in science. Epistemological and philosophical problems in physics (Phänomenologie der Naturwissenschaft. Wissenschaftstheoretische und philosophische Probleme der Physik). Ibero / European University Press, 2. erweiterte Auflage, Wien 2007.
48. Just C: Scientific homeopathy. Part 1 (Wissenschaftliche Homöopathie. 1). Teil. AHZ 234 (1989): 191-196.
2nd part: Hahnemann's letter to Kant. Original text (2. Teil: Hahnemanns Kant-Brief. Originaltext). AHZ 234 (1989): 197-200. 3rd part: Kant and Hahnemann (3. Teil: Kant und Hahnemann. AHZ 234 (1989): 231-240.
49. Würger W: Paradigm crisis in homeopathy: Homeopathic Medicine and reality of natural science (Paradigmenkrise in der Homöopathie: homöopathische Medizin und naturwissenschaftliche Realität). ZKH 2009; 53 (3): 143-149.
50. Holzapfel K: Certainty of healing with the materia medica. Part 1 (Heilungsgewissheit aus der Materia medica). Teil 1. ZKH 2009; 53 (3): 124-129.
- All links last viewed on 4 March 2011.

Ing. Dr. med. Friedrich Dellmour

Austrian Association of Homeopathic Medicine
Head of the Science Department

Österreichische Gesellschaft für Homöopathische Medizin (ÖGHM)
Leiter der Wissenschaftsredaktion
www.homoeopathie.at

Address for correspondence:

Sängerhofgasse 19
A-2512 Tribuswinkel
Austria
dellmour(at)aon.at